

## ティーチング・ステートメント

所属 保健医療学部義肢装具学科  
名前 昆 恵介

作成日 2021年3月17日

改訂日 2024年2月26日

### 【責任】

保健医療学部義肢装具学科に所属している。主な教育活動としては、専門領域の授業担当科目で① 義肢装具学概論②義肢装具学概論Ⅲ③義肢装具の統計Ⅰ④装具学Ⅱ⑤装具学実習Ⅲ⑥装具学Ⅳ⑦装具学実習Ⅳ⑧動作解析工学演習Ⅱ⑨中枢神経と義肢装具評価学演習Ⅱ⑩疾患と義肢装具評価学演習Ⅰ⑪基礎運動生理演習⑫運動学実習⑬臨床実習Ⅰ・Ⅱ⑭総合演習Ⅱなどを担当している。専門科目外の教育活動としては、4年生の卒業研究に対するゼミ指導や国家試験対策講座を展開している。課外活動としてはラグビー部顧問として関わっている。

### 【理念】

理念としては義肢装具士として特定の分野に精通した専門家（プロフェッショナル）だけでなく、あらゆる領域・分野で精通した専門家、すなわち良い意味での何でも屋（ジェネラリスト）を養成することである。義肢装具を必要とするユーザーの抱える問題は多種多様であり、対象者が変われば症状や問題も千差万別である。そのため義肢装具士が取り扱う分野は、子供からお年寄り、障害者からアスリートに至るまで対象者の範囲が広域であり、取り扱う補装具も切断者に対する義手や義足といったものだけでなく、ケガをした人に対する装具や、移動手段としての車椅子、日常生活を快適にするための福祉用具や住宅改造などを含む。このようなことから、義肢装具士の知識面、立ち振る舞いが、広く浅くなりがちになってしまい、残念ながら問題解決に至らず不幸な患者も散見される現状にある。このような現状を打破し、義肢装具を必要とするユーザーに対して、得意不得意分野を超えて、どのような問題に対しても、そつなく対応できる義肢装具士の養成教育が理念としてある。

### 【方針・方法】

あらゆる領域・分野で精通した専門家の養成を行うためには、義肢装具士の国家試験に合格しスタートラインに立つことである。そして目の前の患者にそつなく対応できる業務遂行能力を養うことが方針概要となる。

#### 方針1: 国家試験合格に合格させる 方法1: エビングハウスの忘却曲線理論に従った学習方法の実施

人間は忘れることがあたり前であるという前提にたち、知識の定着には繰り返しの学習が必要であり、そのための方策を以下に示す。

- 1) エビングハウスの忘却曲線理論を繰り返し説明する。

<https://ryugaku-kuchikomi.com/blog/ebbinghaus-the-forgetting-curve/>



- 2) オンデマンド YouTube 動画配信による自宅予習

根拠（一例；疾患と義肢装具評価学演習Ⅰのオンデマンド動画）：

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLNlpPwHNP-ZCpJz3Zo6mEGcNn79Lo0Wff>

- 3) Moodle 小テスト（国家試験に準じた形式）による自宅学習で繰り返す（記憶の定着には8回程度覚えた忘れたを繰り返す必要がある） 根拠：シラバス参照：例（疾患と義肢装具評価学演習Ⅰのシラバス）

- 4) 反転授業の実施：オンラインライブ授業であれ、対面式授業であれ、知識レベル確認のための小テストを実施する。オンラインの場合は Zoom の投票機能を用いる。対面式の

場合は、紙で印刷した小テストを実施するか、もしくはクリッカー端末を用いて投票を行っていく。

- 5) グループ討議によるコミュニケーション 小テストの答え合わせをグループで行い、他者に自分の理解した言葉で解説をさせる。人に教えるためには自分が理解していないとできないので、低学年から実施させる。

## 方法2:成績評価方法の開示

1) 成績評価方法の提示：特に新生では勉強の仕方がわからない学生もいることから、最初につまづくと、学習意欲の喪失に繋がってしまうため、クォーター制度を活用して、前半の成績が振るわなくても後半にリカバリーできる成績評価システムとしている。これによって自分の学習成果がリアルタイムに成績に反映され（Moodle だと直後に成績が開示）、勉強した分結果として跳ね返ってくる実感を持たせることが可能となる。

具体的な評価方法を根拠として以下に示す。

本試験結果：本試験結果は以下の条件で最終得点とする。

最終成績＝小テスト 30 %＋大テスト 70%

小テスト：

Moodle 小テストおよび対面小テストの平均点大テスト

A:中間試験結果>本試験結果＝（中間試験＋本試験）／2

B:中間試験結果<本試験結果＝（本試験結果を採用）

## 方針2:義肢装具士として目の前の患者にそつなく対応できる義肢装具士の育成

### 方法1：レポート作成技術向上のための指導と評価

義肢装具士の臨床技術に必要な能力として、研究者の視点が重要である。特に患者の抱える問題を改善するためには、思考過程のプロセスが重要であり、レポート作成スキルを通して、思考過程を学ぶことは重要となる。

- 1) レポート作成の見本と作成方法を解説する
- 2) 提出されたレポートはルーブリック評価に基づいて添削し、詳細な書き方や内容の指導はコメントでフィードバックを行う。
- 3) レポートの構成をしっかりさせる 背景（症例）、レポートの目的、方法の記載、考察、結論、文献提示という流れを徹底させ、特に考察を重視する。

方法2：徹底的な討議 患者の抱える問題を解決するためには義肢装具士だけで解決はできない、そのため医師、看護師、理学療法士などの多職種と連携を図りながら情報共有と義肢装具の設計案の提示能力が求められる。

- 1) コミュニケーションをとらせる
- 2) 小テスト実施後の答え合わせをグループワークにしてコミュニケーションをとるところから始まり、部活動も通して、仲間を増やしていくことを促す。
- 3) コラボレーションさせる

自分の得意分野は他者に伝達し、不得意分野は他者に教えてもらいながら、専門分野の拡充を図ることで効率が上がるということを認識させる。

- 4) 医療福祉の臨床現場では、学校のように明確な答えはない。そのため問題点を把握する能力が必要であるため、3年生以降の実習では、教員による実習のデモンストレーションを問わず、実際のモデルさん（障害をもったモデル）に対応しながら、問題点把握、改善案の提示、装具設計、良し悪しの評価、レポート作成、プレゼンテーションスキルといった総合力を問う実習形態とする。

- 5) 卒業研究におけるゼミ指導では、学会発表できるレベルになるまで、徹底的に時間をかけて討議を行う（1回のゼミ指導では平均で6時間以上）。

### 方法3：自己研鑽を促す

コミュニケーションとコラボレーションは新たなるクリエイションに繋がる、私はこれを3C理論（communication, collaboration, Creation）と言っているが、これらの実践のためには自己研鑽という行動を促すことである。

- 1) 関連する学会に参加させて、自分の知識レベルを把握させる  
（根拠：関連する義肢装具領域の学会へのゼミ生参加率は例年平均で70%程度である）
- 2) 関連する学会に卒業研究内容を発表させる  
（根拠：過去のゼミ生の中で学部生在籍中に学会発表した例が複数ある。2023年度日本義肢装具学会において学部生が発表）
- 3) 関連する有償の研修会に率先して参加を促す  
（根拠：学科内のメーリングリストから情報発信を行って、東京で開催していた義肢装具士向けの研修会に自由意志で参加してくれた学生が10名程度いた）
- 4) 懇親会等に積極的に参加して人脈を増やす
- 5) 教員が研修会の企画運営に携わっているときには、学生に協力を促す。  
（根拠：2018年度に開催した臨床歩行分析研究会定例会では、昆が大会長を務めたが、自由意志でスタッフを希望してくれた学生が30名程度いた）

### **【成果・評価】**

- 1) 学部生が学会発表を行った（2021年義肢装具学会発表、2023年度日本義肢装具学会において学部生が発表このほかにも過去に発表例あり）
- 2) 大学院生（博士課程）が修了した（学会賞の受賞も過去にはあった）。
- 3) ゼミ生が国家試験の自己採点結果では2018年度以降全員合格している。
- 4) グループワークの効果がみられる（根拠提示困難：授業アンケートの自由記述欄でGWが良かったとのコメントが複数みられた）

2020年度はコロナ禍の影響を受けて、2年生の臨床実習が中止となり、3年生のモデル実習に参加させて2年生、3年生で討議をさせた。3年生はレポートスキルを通して思考過程を学習し、さらに授業ごとのグループワークに慣れていることもあり、2年生と3年生では明らかな討議の差が見られた（発言内容、発言回数に差がある）。これは学年進行に伴うグループワークの効果があつたと考えている。

- 5) 反転授業の効果がでている（論文化）

根拠：昆恵介他：義肢装具養成校の製作実習における反転授業を取り入れた教育効果、POアカデミージャーナル、23（2）、P133-139,2015.

- 6) 学生のレポート作成技術の向上

根拠：添削指導の回数や量が、レポート提出のたびに減少していた。

### **【目標】**

あらゆる領域・分野で精通した専門家の養成を行うためには、義肢装具士の国家試験に合格しスタートラインに立つことである。その後は卒業して義肢装具士になってからは臨床家として千差万別な患者の対応をすることになるが、この際に対象者が満足する義肢装具の提供を可能とする義肢装具士の養成を目標としたい。短期的には国家試験合格率の向上であるが、長期的には対外的な評価として日本義肢装具士協会が実施している認定制度の枠組み中で専門士の称号を得ることができれば社会的に認められたものとなるので、これらが実現できるように教育環境を整備していきたい。

短期目標：2028年度までの国家試験合格률을100%にする  
中期目標：卒後5年以内に日本義肢装具士協会が実施している「認定義肢装具士」の認定が得られる卒業生を卒業生の50%以上排出する  
長期目標：卒後15年以内に、日本義肢装具士協会が実施している専門義肢装具士になり、義肢装具士に対して、講師ができるくらいのジェネラリストな義肢装具士の人材育成を目指す。